

---

# 彼の決断

はなちょこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼の決断

### 【Zコード】

Z2566M

### 【作者名】

はなちょ

### 【あらすじ】

「友人の田辺が結婚したの相手はものすごい女性だった  
主人公が見た友人の結婚生活とは？！」

「お邪魔しまーす」  
俺はそつ言ひつと辺りをキョロキョロ見渡した。  
以前の田辺の家の玄関と全く違つ。  
「いらっしゃいませ。さあ上がってください」  
そんな可愛らしい声と共に田の前に現れたのは  
その辺のアイドルなんかより100倍くらい可愛らしい女性だった。  
「えつと・・・・・貴方が」  
俺が田の前の彼女に見とれながら、そつ言ひつと  
「ああ。これが俺の奥さん」  
部屋の奥から田辺が現れてニッコリ笑いながら言った。  
「はじめまして。藍です」  
藍さんはペコリとお辞儀をした。  
「はじめまして。鈴木です」  
俺もつられてお辞儀をする。  
「玄関なんかにいなで中に入れよ」  
田辺の言葉に中へ入るとリビングに通された。

リビングのドアが開いた瞬間。  
俺は倒れそうになつた。  
それは以前の彼の部屋を知つてゐる者なら皆、驚くことだ。  
だつて独身の頃は足の踏み場もなかつた上に異臭までしていた  
リビングが・・・・・。  
今は綺麗に掃除されているどころかピカピカ。  
家具などは買い換えたのかまだ新品で、絨毯はふかふか。  
もちろん隅々まで掃除が行き届いている。  
さすが結婚すると違うんだな・・・・・。  
俺がそんなことを考えながらリビングを眺めていると。

「立つてないで座れよー」

田辺の言葉に俺はソファーに腰掛けた。

ふかふかのソファー。

テーブルを挟んだ田の前にやたらと大きなテレビ。

「コーヒーで良かったですか？ もし飲めないなら紅茶もあります

よ

藍さんはそう言つて慣れた手つきでテーブルにコーヒーカップを置いた。

「ああ。良かつたです！ コーヒー好きです！」

彼女の可愛さに俺の日本語がおかしくなった。

藍さんはクスッと笑つた。

「こんな可愛い子と、どこで知り合つたんだ・・・羨ましいな・・・」

チラリと田辺を見るとコーヒーに3つも砂糖を入れている。

彼とは小学生の頃からの仲だが決して容姿がいいわけではない。いや、むしろ・・・

小学校の頃は田辺が近づいていた女子は泣き出す、といつ始末で・・・。

そして、それに加えて。

「田辺、お前また太つたんじゃないか？」

俺は砂糖を一つだけコーヒーに入れてスプーンでかき混ぜながら尋ねる。

「ああ。そりなんだよ。どうとう一〇〇キロ超えちまつたよ」

そう言つた田辺の顔に全く緊迫感などは見えない。

「私、少しくらいぽっちゃりしてゐるヒロ君の方が好きだな」

藍さんが笑顔で言つた。

いや、ぽっちゃりつてレベルじゃないけどな。

「藍の作る料理な、高級レストラン並みの美味さなんだよ。だから、ついつい食べすぎちゃって」

田辺がそう言いながらコーヒーを啜つたので、俺もコーヒーを一

「飲んだ。

「なんだこれ…………すうじく美味しい…………」

俺は思わずそう言ってしまった。

「そつかそつか！　コーヒー通のお前に誉められるなんてかなりのもんだ」

「ありがとうござります。おかわりありますからね」

「ああ。そついえば今日の晩ご飯、お前も食つていいくか？」

田辺の言葉に俺はチラリと藍さんの顔を見た。

「どうぞどうぞ。今日はビーフシチューと蟹クリームコロッケ、それからサラダなんだけど嫌いじゃなければ食べていいってください」「藍さんが笑顔でそう言つたので俺は夕食を駆走になることにした。

あんな美味しいコーヒーを淹れる奥さんが作る手料理を食べない理由がない。

それにしても・・・・。

俺はコーヒーが大好きで週4ペースで様々なカフェに行っている。さらに美味しいコーヒーが飲みたくて海外にまで行つたが、これだけ美味しいコーヒーを淹れる店は、まだ片手で数えられるほどだ。

「お前の奥さんは元ショフかなにかか？」

「いや。違うよ。そういう手に職はないよ」

田辺の言葉に俺は首をかしげた。

後で淹れ方を教えてもらおう。何かコツもあるんだろう。

藍さんの手作りの夕食はビックリするほど美味しかった。

最近、田辺を外食に誘つても全く乗つてこない理由が分かつた。

こんな美味しい料理を毎日、食べていたら、どんなに評判の店だらうが三ツ星レストランだらうが

家で食べる料理の方が美味しいと感じてしまう。

藍さん、以前はどこかの有名レストランで働いていたんじゃないんだろうか。

「ヒロ君、お風呂わいたよ」

食後のコーヒーを飲んでいたら藍さんがキッチンから戻ってきた。  
田辺にそう告げた。

「ああ。今日は後にするよ。むつ少し鈴木と喋りたいから」「分かった。私はまだやる」とあるから、一人でゆっくり話してね」

藍さんはやうに皿のとコーンリングを出て行った。

「奥さんも毎日あんな料理食べてるんだよな?」

「そうだよ」

「それなのに、なんであんなに細いんだ? つてゆーかスタイルものすゞくいいよな」

「だり?」

田辺は嬉しそうにそう言つた。

俺はコーヒーを一口飲んでから言つた。

「完璧<sup>かめい</sup>なよ・・・・・外見も性格も家事も完璧なんて・・・

・・・

「そりゃあ、お前」

田辺はそこで一皿、言葉を切つてリビングのドアに手をやつた。

藍さんが入つてくる様子はない。

田辺が続ける。

「藍はそういう風に作られたんだから」

「作られた?」

俺は思わずそう聞き返した。

「ちよつと待つて」

田辺はやうに机の棚の引き出しを開けて何かを取り出した。

パンフレットのようなものを持って戻つてくるとそれをテーブルの上に置いた。

パンフレットには沢山の女性、しかも美人ばかりが表紙になつていて

『貴方の未来の奥さんは』『ここにあります』と金色の文字で書かれていた。

しかし驚くのはそこではなかつた。

「アンドロイド妻パンフレット」

田辺がパンフレットの表紙に書かれた文字を読み上げた。

「まさか・・・・・・」

「やう。藍はこれ」

田辺はパンフレットのページをめぐりながら言つた。

彼の手が止まつたページに田をやると、藍さんそつくりな女性が[写つていた]。

その女性を囲むように細かい文字でせつしりと説明が書かれてあつた。

『アンドロイド妻』〇・3 藍

ページの一番上にはそう書かれてあつた。

「藍はな、一番得意な家事が料理なんだ。日本料理はもちろんフランス料理に中華料理、イタリア料理、インド料理まで。作れない料理はない」

田辺は一人で頷きながら言つた。

「アンドロイドなんて・・・・・嘘だら・・・・・」

「嘘じやねーよ。考へてもみる。あんなアイドル並みに可愛い奥さん、俺がもらえると思うか?」

「・・・・・それはそうだな」

「そこで納得したか。ま、いいや。これから時代、妻は金で買つんだよ」

「いへらしたんだ?」

田辺は俺の質問にパンフレットを指で指した。  
そこに値段が書いてあつた。

「ああ。思つたより無茶な金額じゃないんだな・・・・・・」

頑張れば俺にも買えないことはないな。

「…………つてお前。これで藍さんを置つて、その上、新品の家具まで揃えたってのか？！」

「いまキャンペーン中でさ。抽選で当るとクーポン券がもらえるんだよ」

「へえ。キャンペーンもやつてるのか

俺はそう言つと考へこんだ。

田辺がそんな俺を見て言つた。

「アンドロイド妻は人間じゃない。作り物だ。でも完璧なんだ。外見も性格も家事も何かもが。しかもメンテナンスをしていれば、あの若さと美貌、それからスタイルも半永久的に保てるんだ」  
俺は田辺の話を聞きながらコーヒーを一気に飲み干した。  
そしてポツリと言つた。

「俺も買おうかな」

俺の言葉に田辺が田をキラキラさせて言つた。

「本當か？！俺の紹介で鈴木がアンドロイド妻を買えば、紹介料として藍に新たなオプションをつけてもらえるんだ！」

「オプションってなんだ？」

「それはな・・・・・・

ふつん。

そこで映像が切れた。

テレビの画面は真っ暗になった。

「あ、あとちょっとだつたのにー！」

中年の男がそう言って椅子ごと、ぐるりと後ろを振り返つた。

「社長、このCMを何回見るつもりですか？」

リモコンを持つて立つている女性がそう言つた。

「自分の会社のCMを何度見ようが私の勝手じやないか」

「それより決めていただきたいことが沢山あるんです」

「そう言えばそうだつたな・・・・・・」

「社長と呼ばれた男は手元の資料に目を落としてそつと語った。

「それからマスクミが結婚しない男性が増えたのは我が社の影響ではないか、と報道しております」

「マスクミの連中なんて気にするな。あいつらは金でなんとかなる男は資料に目をやりながら続けた。

「それより例のものは進んでいるのか?」

「アンドロイド夫のことですか? あちらはまだ試作品の段階ですが順調のようですね」

女性は少しだけ穏やかな口調になつて答えた。

「それならいい。女共がうるさいからな・・・・・・」

男はそつと額の汗を拭つた。

「それではまたなにがありましたら、お呼びください」

女性はそつとドアに向かつて歩き出した。

彼は社長室を出て行く女性の後姿を見つめていた。

完璧な「アンドロイド秘書」

実は彼女は元々は人間の女性だつた。

しかし彼女は病氣のため、あまり長くは生きられない状態にあつた。

その時、彼は思いついたのだ。

彼女の記憶だけをアンドロイドに移植し「アンドロイド秘書」にしたのである。

彼は優秀な秘書を持つことができ、彼女は新しい体を手に入れることができた。

「社長、お薬の時間です」

七時きつかりに秘書が薬と白湯を持って社長室に現れた。

「ありがとう」

社長はそつと薬を喉に流し込んだ。

ふう、と息をつき彼は独り言のように呟いた。  
「私にも新しい体が必要だな・・・・・」

(おわり)

(後書き)

「」で読んでもくれた方、ありがとうございました。

これは2009年12月23日[書いたものです。  
クリスマスっぽいお話を、と迷ったんですが・・・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2566m/>

---

彼の決断

2010年10月8日14時30分発行